悠久の名作シリーズ（6）

『萬歳楼』王昌齢

中国三大楼閣の詩

萬歳楼　王昌齢

江上巍巍萬歳楼
不知經歴幾千秋
年年喜見山長在
日日悲看水獨流
猿狖何曾離暮嶺
鷗鶴空自泛寒洲
誰堪登望雲烟裏
向晩茫茫發旅愁

萬歳楼　王昌齢

江上巍巍たり萬歳楼
知らず經歴す幾千秋
年年喜び見る山長えに在るを
日日悲しみ看る水獨り流るるを
猿狖何ぞ曾て暮嶺を離れん
鷗鶴空しく自ら寒洲に泛かぶ
誰か堪えん登望雲烟の裏
晩に向かって茫茫旅愁を發するに

【詩の意味】

長江のほとりに高く聳えている楼、その名も万歳楼。この楼はいったい何千年経過したものか知る由もない。

私は毎年周囲の山々が永遠に姿を変えずその場所に在ることを喜んで眺めるが、一方毎日長江の水はただ流れてもとに返ってこない流転の姿を見ていると悲しくなるのである。

さて悲しいと言えば、あちこちで鳴き声を挙げている猿たちはどうしてこれまで夕暮れにそれまで生まれ育った峯を離れたことがあるのだろうか。一生同じ所に暮らして生涯を終えている。

また水に生息する鵜はあてもない様子で寒々とした中洲あたりにおぼつかなく浮かんでいる。（自分の流浪の姿に似ている）

霞がかすむ中に、この楼に登り四方を眺め、やがて夕暮れとなり、はてしない旅愁がわき起こってくる寂しさにいったい誰が堪えられるであろうか。

【解　題】

万歳楼は今の江蘇省鎮江城の西南の隅にあり、晋時代の皇后の兄の地位を利用して将軍となりこの地に赴任した晋の刺史王恭が勢力に任せて建設したものである。この詩は作者が鎮江から西に数十キロ離れた江寧県（今の南京）の次官に左遷されたころこの楼を訪れて作ったものである。年齢は50をいくつか過ぎたころと思われる。

【解　説】

首聯……「江」は長江を指す。このあたりでは川幅も3キロ

は超えていると考えてよい。南の芙蓉楼と対崎しており、歴史と景観の楽しめるところでもある。楼の姿を調べたが未だ見つからない。創建以来幾千年を経たかわからないといっているが作者の時代から数えて３５０年ほど前に創建された。そのことは作者は承知だが「万歳楼」の名が示す通り歴史の永遠性を示すため誇張表現したのである。

領聯……明瞭な対句である。3句目は自然の永久さを例示し、4句目は人の世のはかなさを示している。特に川の流れが世の無常をいうのもよく目にするが、古いところでは、「論語」の子罕篇にある「子（孔子）川の上に在りて曰く『逝く者は斯くの如きかな。昼夜を舎(お)かず』」の一文を踏まえている。わが国にも鎌倉時代の随筆「方丈記」の冒頭に「逝く川の流れは絶えずしてしかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは且つ消え且つ結びて久しく留まりたる例(ためし)無し」とあり、無常を嘆いている。

頸聯……生まれ故郷に安住する猿を羨(うらや)み、川面に浮かぶ寄る辺のない水鳥に不安を覚えている対句で、水鳥は左遷の身の作者の投影とみる。

尾聯……主題である。楼に上って景観を楽しむうち異郷の人である自分を顧みて寂しさに陥る詩も多く目にする。この詩も帰郷の目途のない愁いの身の作者が現れて詩が終わる。その後どうなったのだろうと思わせて余韻が残る。

なお「晩」は漢詩では杜牧の「山行」の転句にある「楓林の晩」にあるように夕暮れの意であり、詩集によっては「くれ」と読ませているものもある。

【鑑　賞】

絶句の王昌齢だが律詩もまたよし

この詩は50歳代半ばごろと推定される。先の短いことが頭をよぎる年齢であるから望郷の念もひとしおであろう。なぜ彼は貶謫の生活が多いのか。政府高官の意に沿わないと一朝にして左遷される例を私たちは多くの詩でよく知っている。この詩の作者の場合はどうなのだろうと調べたが、詳しいことはわからない。教本には「素行が収まらず」とある。不埒な役人の印象を抱いてしまう。別の詩集には「細行を護らなかったので人々に疎まれた」とある。また「振る舞いに慎重さを欠き周囲と衝突したのが原因」というのもあった。しかし、彼の肩を持てばおおらかな性格で独創性に富み、些細なことは二の次にした有能な役人ととれるが、役人は大胆かつ細心で周囲を大切にしなければいけないということが要求されるとしたら信頼の欠ける人だったのだろうか。いずれにしても晩年を異郷の地で空しく日を送る作者に同情したい。ある本には高楼からの望郷詩として「黄鶴楼」「岳陽楼に登る」とともに三大律詩とあった。李白とともに絶句の名手としての評価は高いがこの律詩はまた格別の秀作であるという評もある。

【参　考】

四つの顔を持つ王昌齢

王昌齢の作品は絶句・律詩を合わせて「唐詩選」に19題採用されている。杜甫や李白や王維などに匹敵する大詩人である。それらを主題別にみると同一作家かなと思われるほどの4系統の詩に分けられる。1つはこの詩のように人生の哀切を歌う歌。2つ目はいわゆる辺塞詩と呼ばれる国境警備に出征する兵士の労苦を歌う歌。王昌齢が軍役に就いたという記録はないが、風聞により異郷での辛苦を歌う風潮が詩人の中にあった。「胡笳曲」をはじめ本会採用の「従軍行」や「出塞行」などである。3つ目が宮中や高貴な家の夫の出征で残されたさみしい女性に同情した宮怨詩である。なかでも「閨怨」と題する詩は「彼の絶句の中でも第一の佳作である」という評もある。（明治書院「唐詩選」）4つ目は送別の歌。「芙蓉楼にて辛漸を送る」がもっとも有名。

「閨　怨」　王昌齢

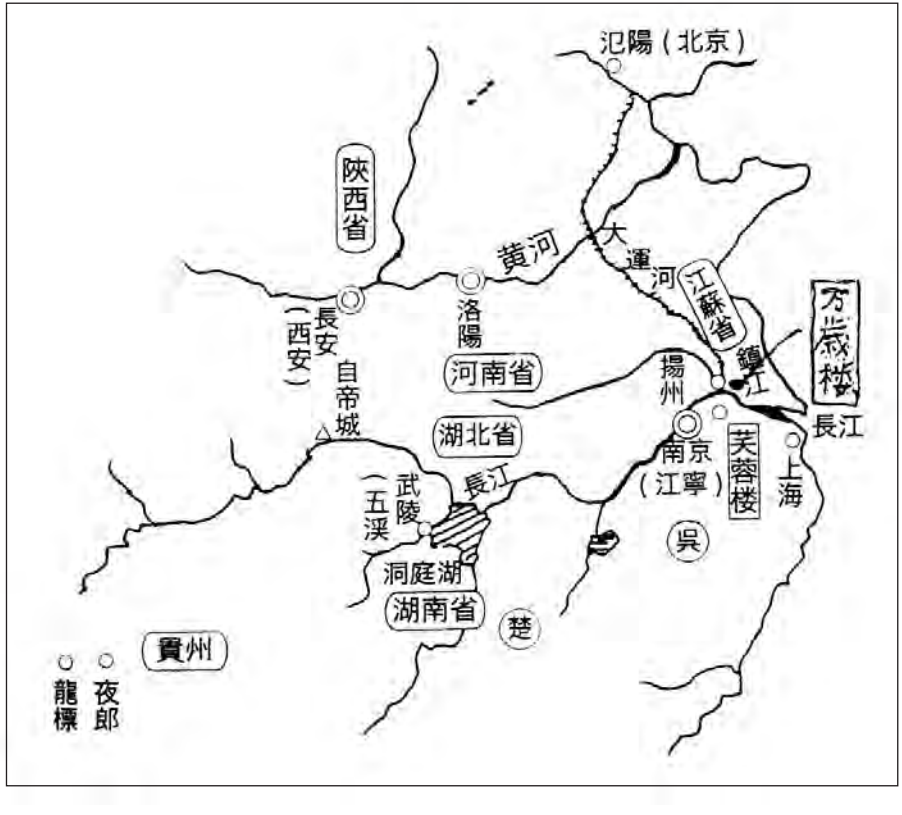
閨中少婦不知愁
春日凝粧上翠楼
忽見陌頭楊柳色
悔教夫壻覓封侯

閨中の少婦愁を知らず
春日粧を疑らして翠楼に上る
忽ち見る陌頭楊柳の色
悔ゆらくは夫壻をして封侯を覓しめしを

（注）　閨は女性の部屋またはそこに暮らす女性
　　陌頭は町の道端　教はさせる　夫壻は夫
　　覓はもとめと読んで要求すること

【作者】王　昌齢　698～755（諸説あり）

盛唐の政治家・詩人。字は少伯、京兆（西安）の人。一説には江寧（江蘇省南京）の人ともいう。開元15年（727）29歳で進士となる。秘書省の校書郎（図書校閲官）に補せられ22年、汜水（しすい）県（河南省）の尉（じょう）（県の次官）となるも素行おさまらず、官界の評判は悪く各地に転任される。50代の半ば江寧（今の南京）の丞（次官）に転任させられ最後は龍標（貴州省）の尉（軍事・警察を司る役所の次官）に貶せられた。七言絶句の名手で、特に宮怨の詩（宮女の嘆きを歌った詩）は李白も及ばないといわれる。李白・孟浩然・高適らと交遊があった。晩年には安禄山の乱を避けて郷里に帰った折、刺史（州の地方長官）の閭丘暁に殺された。「王昌齢集」5巻がある。享年57。


汜陽（北京）
陝西省
黄河
大運河
江蘇省
万歳楼
鎮江
長安
（西安）
洛陽
河南省
揚州
自帝城
湖北省
南京
（江寧）
芙蓉楼
長江
上海
武陵
（五渓）
長江
呉
洞庭湖
湖南省
楚
貴州
龍標
夜郎